

○早稲田大学史学会・連続講演会

趣旨と経過

大日方純夫

○早稲田大学史学会学外評議員の交代

本年四月の学内評議員会の承認を受け、

近藤申一・仲手川良雄両氏が退任し、根占

献一氏（学習院女子大学教授）・佐久間弘

展氏（本学教育学部助教授）の両氏が新たに学外評議員に就任した。

○『史観』印刷所の変更

（株）大文堂印刷の廃業（大文堂印刷社長

梶原邦夫氏急逝による）に伴い、四社による入札の結果、今冊から『史観』の印刷所が（株）白峰社に代わりました。大文堂印刷は第三十六冊（一九五一年）から第一四四冊（二〇〇一年）まで『史観』印刷を担当。長い間の感謝を込めて、ご冥福をお祈りいたします。

「早稲田で歴史を学ぶということ」

こと

（於文学部校舎）

第一回 平成十三年六月二十七日（水）

史学科が生まれた頃

—— 久米邦武と吉田東伍 ——

佐藤 能丸（日本史）

西洋史研究の開拓者

—— 煙山専太郎 ——

柴田 卓弘（西洋史）

第二回 平成十三年七月二日（月）

東アジア世界論の創始者

—— 栗原朋信 ——

工藤 元男（東洋史）

早稲田の考古学事始

—— 西村眞次 ——

高橋龍三郎（考古学）

早稲田大学史学会では、早稲田大学文学部学生を主な対象とする連続講演会を、六月末から七月初めにかけて、二回にわたって開催した。開催の主眼は、歴史学に対する学生の興味・関心を啓発することであり、今回は共通テーマを「早稲田で歴史を学ぶということ」に設定した。各回とも二人の講師の講演で構成したが、目ざすところは、「早稲田」における歴史学の成立ちや特徴を、「人」に即して提示していただくことを通じて、その史学史的意味に関する認識を深め、また、歴史学に対する関心を喚起することであった。参加の呼びかけ文は、

つぎの通り。

文学部で学ぶみなさん ——

早稲田の歴史学がどんなふう生まれ

てきたか、ご存知ですか。

早稲田の歴史学にはどんな個性がある

か、聞いたことがありますか。

早稲田の歴史学の歴史をひもときなが

ら、一緒に考えてみましょう。

第一回目の六月二十七日(水)は、四時限にあたる一四時四〇分から一六時二〇分まで、文学部三六号館五八一教室で開催した。前半は、日本史学の立場から、佐藤能丸氏(早稲田大学史資料センター嘱託)が「史学科が生まれた頃——久米邦武と吉田東伍」と題して講演し、後半は、西洋史学の立場から、米田卓弘氏(早稲田大学名誉教授)が「西洋史研究の開拓者——煙山專太郎」と題して講演した。参加者は、約一五〇人。

第二回目の七月二日(月)は、三時限にあたる一三時から一四時三〇分まで、三八号館AV教室で開催した。前半は、東洋史の工藤元男氏(文学部教授)が「東アジア世界論の創始者——栗原朋信」と題して講演し、後半は、考古学の高橋龍三郎氏(文学部教授)が「早稲田の考古学事始——西村眞次」と題して講演した。参加者は、約六〇人。

今回は初めての試みとして、ひとまずの

成功をおさめたと言えようが、今後、テーマ設定の仕方や講演の中身、進行の方法などについて、さらに工夫を重ねていく必要がある。

〈第一回〉

史学科が生まれた頃

——久米邦武と吉田東伍——

佐藤能丸

早稲田大学文学部の史学科は、近代日本の史学史上、独自の歩みを経て今日に至っている。これから、史学科を選択する諸君は、こうした歴史ある伝統を引継ぐべき使命を帯びている。

一、東京専門学校草創期の

「史学」担当者

一八八二年に早稲田大学の前身である東京専門学校が政治経済学・法学・理学の三学科をもって創立されたが、草創期の全学の「史学」の担当者は坪内雄蔵であった。

坪内は東京大学で政治学及理財学(経済学)を修めた者で、当初は「文学者」ではなく、社会科学の専門家であった。やがて、創立八年後に文学部が新設され、学科は徐々に変化・再編成されていった。

二、文学部に「史学科」

「史学及英文学科」を設置

一八九八年九月に文学部に「史学科」が新設された。(東京)帝国大学教授を「久米邦武事件」で辞職を余儀なくされた久米邦武が翌九九年三月に教員として招聘され、その直後の九月に「史学科」は「史学及英文学科」となった。これは「尋常中学及師範学校教員たるに適」する教員養成を目的とする学科編成によるものであった。

三、「早稲田大学」と改組改称後

の「史学科」の変遷

一九〇二年九月に東京専門学校は、「早稲田大学」と改組改称されたが、「史学科」の系統は、専門部歴史地理科、高等師範部歴史地理科、大学部師範科歴史地理科、大学部文学科史学科、高等師範部第一部国語